INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ ニュース NO.69

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1992年12月25日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
TEL.03-3821-3737
FAX.03-3821-6479
発　行　人　住友 義輝
頒　　価　1部200円

●世界家族の仲間入り　●信頼できる人との出会い　●新時代に必要な情報　●心身の健康　●問題解決の秘訣

第46回 MRAコー世界大会レポート

●1992年7月3日㈮～8月29日㈯　●スイス、コー、マウンテンハウス

総合テーマ

「民主主義は自らの変革から始まる」

Democracy...starts with me

■世界各国から約2千人が参加し、意見を交換した

■過去の苦闘を将来の糧とするために

●（上の写真説明）初めて開かれた家庭・教育会議は、世界中の参加者の共同作業によって企画、運営された

レマン湖畔の街モントルーから登山電車で三十分程登った所に、コーという村がある。そこにMRA世界会議場「マウンテンハウス」がある。一九〇二年に豪華ホテル「コー・パレスホテル」としてオープンしたマウンテンハウスは、鉄道による外国旅行が主流だった今世紀初頭、ヨーロッパ人観光客の高級リゾートホテルとして隆盛を誇った。南極点到達で知られるイギリスの探検家スコットも宿泊したという。

しかし、第二次世界大戦中はユダヤ人やイタリア人難民の収容所として使われたため、すっかり荒廃してしまった。その当時、「分裂してしまったヨーロッパの融和と世界の平和のために、この建物を世界中の人々が集える場所としてスイスが提供できないだろうか」と考えたスイス人外交官とそのアイデアに共鳴した人たちがいた。戦後間もなく九十五家族の協力を得てマウンテンハウスが買い取られ修復の後、MRAに寄贈された。こうして終戦の翌年（一九四六年）より、毎年夏に、MRA世界大会が開かれてきた。

日本からは四十名が参加

今年で四十六回目を迎えたMRAコー世界大会は七月三日から八月二十八日まで開かれた。「民主主義は自らの変革から始まる」という全体テーマの下、様々な会議が開催され、世界各国から約二千名が参加し、日本からも四十名が参加した。

開会式「障壁を超え、破れ目を繕い、ヨーロッパを作り直すパートナー」（七月三日～十三日）は、旧東欧諸国やバルト三国を含むヨーロッパ全土からの参加者を中心に開催された。ここ数年、旧共産主義諸国の民

▽主な内容△

◆第46回コー世界大会レポート――1P
「民主主義は自らの変革から始まる」
■小林祐子　■雑賀友佳子
■上山博司　■中田朱美
■藤井俊　■堀金由美
■原田愛香　■和佐隆弘
■相賀照則　■和佐健介
◆第7回コー円卓会議レポート――17P
「日米欧―競争と協調の新しい道」
レポート　塙義一――21P
◆アジア・太平洋青年キャンプ――25P
■呉東桓　■松本佳子

主化、ソビエト連邦の崩壊、旧ユーゴスラビアなどでの民族紛争の激化、あるいは欧州統合の是非などをめぐってヨーロッパはまさに混沌としている。ヨーロッパ議会の議員を務めたあるドイツの政治家は、「経済統合は、欧州の家の柱の一つに過ぎず、政治的、社会的つながりを持たない単なる経済統合はピサの斜塔となるだろう。ヨーロッパの枠組みばかりが話題になっているが、ヨーロッパの人々のことを忘れてはいけない。私たち全てが少数民族であり、ヨーロッパ大陸は各民族の多様性で成り立っている。経済共同体が旧共産圏を除外しようとしているのであれば、とても残念なことだ。今日の経済共同体が結成される前提として、戦後先ず和平が先行した訳で、その平和を分かちあわなくてはいけない」と述べた。

「バイクに乗った伝道師」も豪州より参加

続いて開かれた都市問題会議「都市の未来―人間的要素の尊重」(十五日～二十一日)には約四百人が参加した。今年五月のロサンゼルスの暴動はまだ記憶に新しいが、アメリカ社会の人種差別の改善に取り組む弁護士たちや、イギリスの人種問題のカウンセラーたちが、現状打開のためにお互いの意見を交換した。オーストラリアからは「バイクに乗った伝道師」として広く知られているジョン・スミス牧師が参加した。「青少年問題を法律で裁くのは、形式上の解決にすぎない」と語るスミス牧師はアルコール中毒や麻薬で苦しむ青少年を救うために、「神のチーム」と背中に記した革ジャンパー姿で広大なオーストラリアをオートバイで行脚している。

教会指導者、コミュニティリーダー、市職員を含む二十八名の市民と共に参加したアメリカ、バージニア州リッチモンド市の黒人市長ウォルター・ケネディ氏は、「様々な立場のコミュニティリーダーが手を携えて全ての市民に安全とサービスを与える」というビジョンを述べると共に、地域住民との連帯による地域防犯政策や雇用創出プログラムなどを紹介した。コーの大会参加後、リッチモンドの参加者一行は、九三年六月十六日～二十日に同市においてMRA国際都市問題会議「アメリカの心を癒す―人種、和解、責任に関する率直な対話」を開催することを決定し、市長自らがその準備に奔走している。

青年会議「壁を打ち破れ！」(二十四日～三[illegible]日)には地元ヨーロッパの青年の他にも南米諸国の青年も多数参加した。ベルリンの壁が取り壊されても、人々の心の中に厚く存在している壁を取り除くために、家庭、社会、国家といった壁についての様々な意見が交換された。日本からも多数参加した。

教育・家庭会議「変わりゆく世界の中で何を学び、何を教えるか―モラルと精神的側面から」(八月六日～九日)には、家族はもとより、大学教授から学生まで様々な立場から教育に携わる五百名近くが参加し、個人の人格形成に果たす教育の役割が話し合われた。日本からは早稲田大学等で講師を務める荒井佐忠子さんが参加した。ただ学問を教えるだけでなく、創作劇を通した心の教育を目指しているイギリスの数学教師の話や、七百三十人の学生たちで組織しているボランティア団体と共に、ブラジルのリオデジャネイロのスラム街開発のための奉仕活動をしている北アイルランド出身の女性教師の話等が紹介された。

特権なき社会を築くための闘い

続いて開かれた地域問題会議「危機に陥った地域、危機から脱出しつつある地域―互いの経験から学ぶ」(十

●青年会議でスピーチするヨルダンの参加者

●都市問題会議では、各国のコミュニティリーダーたちによるパネルディスカッションも行われた。右から2人目がオーストラリアのスミス牧師

一日～十七日）には、フランスやオーストラリア在住のカンボジア難民たちも参加し、祖国再建への希望を語った。

ゲリラ戦が沈静化しつつあるエルサルバドルの国会議長と最高裁判所長官は、「私たちが必要としているのは信頼できる司法制度と公正な選挙制度である。特権なき社会を築くために我々は闘った。苦しみの時代に戻ることを望む者はいない。過去の苦闘を将来の糧としなくてはいけない」と語った。

ワシントンの有力なシンクタンク、国際戦略問題研究所（CSIS）からは、十一名の学者、神学者、社会学者、軍事戦略家などが参加し、八つの国際紛争解決に影響を与えた精神的、宗教的要因のケーススタディーの発表を行った。そして、「精神的動機付けを持った人々が非暴力の基盤に立った建設的変革をもたらした」として、戦後のドイツとフランスの和解と、ジンバブエの無血独立にMRAの果たした役割を評価した。そして、「アメリカ外交の失敗は、力の失敗ではなく、異文化理解の失敗」であり、「コーのような傷を癒す場所での交流をいかに現実政治に活かしていけるかが課題（挑戦）である」と述べた。

ロシアは調子にのってプールに飛び込んだ陸上選手？

今夏最後の会議となった産業人会議「市場経済に必要な道義的基盤」（十九日～二十三日）には、日本から相賀照則常務を代表とする第十五次東芝労使代表団六名や、和佐隆弘日本経済新聞論説委員が家族同伴で参加した。スイス、ローザンヌのヨーロッパ最大のビジネス・スクールIMDのガレリー教授による基調講演や、「市場経済の倫理的展望―ロシアとアメリカの比較」をテーマにしたハロラン教授（アメリカ、セント・トーマス大学）とスプラン教授（ロシア科学アカデミー哲学法律研究所）の共同講演も行われた。スプラン教授は「現在のロシアは、陸上選手が調子にのって市場経済というプールに飛び込んでしまったようなものだ」と冗談を交えながら、「ソビエト帝国の崩壊の原因は経済の破綻だけではなく、人間性を無視した理論や物質主義にもあった。再建の道は険しい。経済復興も大切だが、これからは言語、文学、芸術などロシア文化の背骨とも言える価値観を復活させなければならない」と話していたのが、印象的だった。

ほかに特別プログラムとして、世界各国の大学生を対象とする、新しい国際秩序に則した紛争解決の秘訣を直接解決に携わった人々とケーススタディから学ぶための「第二回コー・スカラーズ・プログラム」（七月九日～八月十三日）、歴史教育の改善などロシアにおける様々な問題が話し合われた「ロシア・セミナー」、専門家も交えた「第五回環境問題に関する対話」（八月二十日～二十二日）、日本から九名が出席した「第七回日米欧経済人円卓会議」（八月二十二日～二十六日、別レポート参照）も開催された。

ソ連がもたらした罪と暴力に対する検証

「ソビエトの歴史の道義的責任―悪に対する抵抗の経験」というテーマで開かれた「ロシア・セミナー」は、モスクワニュースのカルピンスキー編集長、エリツィン大統領のアドバイザーで作家のカリャーキン氏、哲学者セノコソフ教授、ゴルバチョフ財団サルミン部長を含む十六名のロシア人と九ヶ国十二名の旧東欧諸国の学者や作家が参加した。「暴力と非暴力」、「ロシアのニヒリズムの克服」、「悔い改めへの道」といったテーマで行われた歴史の見直しの対話は、自虐的とさえ思えるほど、ソ連

●今年、ニュージーランドから4,000個のキウイフルーツがコーに贈られた。ニュージーランドの参加者が一緒に記念撮影

●地域問題会議にフランスやオーストラリアから参加したカンボジア難民たち。祖国再建への熱い思いを語った

という全体システムが自国民や他国にもたらした罪と暴力に対する検証であった。そして秘密警察など権力の力によって被害を蒙った人々が、そのシステムの中で生きた一ロシア人としての罪を他の旧東欧諸国の人々の前で懺悔している姿は、個人としてのロシア人の信念と信仰の強さを物語る感動的場面であった。「コーという許しの場所と雰囲気の中でこそ起こり得たことである」と参加者の一人が語ったが、戦後四十五年以上経過しても「歴史の過去の克服と責任」を果たしていない日本人との格差を感じずにはいられなかった。

ますます大きくなるマウンテンハウスの役割

東西冷戦が終結し、人類が全面核戦争の恐怖、緊張からとりあえず解放されたのは、ついこの前のことだが、それでも地球上には様々な問題が山積している。深刻な環境破壊は、核戦争とは違った次元で人類の死活問題である。また、民族紛争などは倫理や道徳観以前の、人間の本質に根ざす問題である。ドイツのネオ・ナチスの横行ぶりは歴史で学んだ攘夷運動や中国における義和団事件を彷彿させるが、そのような歴史は繰り返してはならない。

現代は、科学技術先進国が次から次へとロケットや人工衛星を打ち上げ「宇宙時代の幕開け」と華々しく宣伝する一方で、人間性が退化しつつあるアンバランスな時代であるだけに、この半世紀の間に数多くの人類融和のプロセスをもたらしてきたマウンテンハウスの役割はますます大きくなっている。(終)

●文化の夕べでは日本人も着物姿で合唱し、アメリカ人の少年たちも助っ人で参加した

●クッキングも大事な会議プログラムの一つ。未経験者大歓迎！

東南アジア通信

The South East Asia Correspondence

SEAC 東南アジアを伝える雑誌です

東南アジア通信をぜひ御一読下さい。

●東南アジアの個々の顔と●

アジアは豊饒ゆえに多様です。それぞれの国にそれぞれの顔があり、それぞれの地域にそれぞれの息づきがあります。一つ一つの顔とじっくり向かい合い、その息吹を受け止める感性が、新たな時代の橋を作るはずです。等身大の人間どうしの理解が、いまこそ求められています。時代は私たちに問いかけています。一人一人の人間に、私たちは人間としていかに共感できるでしょうか。

〒158　東京都世田谷区奥沢 7-15-13
TEL(03)5706-7847　FAX (03)5706-7848

お電話、または御郵送でもけっこうです。

東南アジア通信 季刊 年4回発行
B5版　90P　定価750円
■定期購読■　年会費　3200円
■■賛助会員■■年会費　5000円

入会のご案内

(1)正会員　個人　年額　3、000円
　　法人　年額　50、000円
(2)賛助会員　個人　年額　1、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座
　東京八―三八二八九
口座名　社団法人
　国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌ーMAJニュース等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

●世界家族の仲間入り
●信頼できる人との出合い
●新時代に必要な情報
●心身の健康
●問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度一口50、000円(寄付扱い・年額)を設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号
　東京五―四一三六六五
口座名：社団法人国際MRA日本協会特別協力年会費

コーで過ごした忘れ得ぬ日々

―人生は素晴しい冒険―

小林祐子
武蔵野女子大学三年

世界から見た日本を自分の目で見るために

七月十五日、まだ梅雨が明けず、肌寒さを感じる日が続いていた。

私が、コー行きを決意した理由は、昨年の台湾でのユースキャンプで学んだことをもとに、今度は長期にわたってコーに滞在し、一部だけでなく、コーとはどういう所なのか、他の国の若い人たちはどんなことを考えているのか、国の抱えている問題は何なのか、そして、世界から見た日本を、自分の目で見て、多くのことを感じたかったからである。また、今後の私の人生観を大きく変えていくのではないかと、期待と少しの不安を抱きながら、日本をあとにした。

コーに着いたのは十六日の正午であった。約二十六時間の長い旅だった。ヨーロッパは初めてで、時差の関係も手伝って、かなり疲れていた。

「ここが、例のマウンテンハウスか」、とモントルーから乗った登山電車を降り、可愛らしいコーの駅からほんの少し歩いたところに、その建物は悠々とそびえ立っていた。第二次大戦前は高級ホテルであり、ディズニーランドにあるシンデレラ城のモデルにもなったというマウンテンハウスは、想像を絶するものであった。

私の部屋は四人部屋で、アンティックな家具があり、バルコニーからはスイス・アルプスと美しいレマン湖を望むことができた。こうした最高の環境の中で生活は始まった。

心を一つにして料理したクッキングチーム

私が着いた時は、すでに都市問題会議が始まっており、四百人ほどの人達が会議に参加していた。着いたばかりで、どうしたらよいのか分からずに、ただおろおろとするばかりだった。そんな時、楽しみのひとつでもあった、フランスのミッシェル・ソンティス夫妻と会うことができた。彼は、私の父の古くからの友人である、彼が日本に来た時、わが家に招いて、一緒に食事をしたのである。当時、私は十歳であったが、その記憶ははっきり残っている。あの時の「背の高い外人さん」が目の前にいる、その私の家族を知っている人がいるということで、ずいぶんと緊張がほぐれた気がした。ソンティス夫妻の温かい配慮で、私は彼らと同じクッキングチームに加わり、毎日の食事を交代で作った。チームにはそれぞれチーフがいて、手際よく指示をして、素人とは思えないようなおいしい料理を作った。準備にかかる前に三十分程のミーティングがあり、自分の好きな仕事を選び、それも決して強制はしないというやり方だった。また、感謝の気持ちを込めて、みんなでお祈りをするのにも感心した。

イギリス人の多いチームではあったが、異なった国々の人間がひとつになってたくさんの料理を作るのだから、それはそれは大変である。しかし、これといったトラブルもなくスムーズに事が運んだのも、それぞれが協調し合い、秩序を守ったからだろうと思う。今でも思い出すのは、魚のフライを何百個と揚げたことである。キッチンにいる時間は、平均五時間ぐらいであったが、一生懸命だったせいか、あっという間に過ぎてしまった。食事を作り終え、チームのみんなと食べる食事は、格別な味がした。

●クッキングチームでフルールバスケットを準備する

恐れの壁を捨てて前向きに生きる大切さ

七月二十四日から、私が参加する会議の中で、最も中心となる青年会議が始まった。この会議のテーマは「壁を打ち破れ！」である。私たちは、非常に多くの壁を持っている。心の壁、他人と自分の壁、集団の壁、国と国との壁、数えたらきりのない話である。この一週間は、このような様々な壁をどのようにして克服していったら良いかを、お互いの経験を通して話し合った。朝食前に静かな時を持ち、今、自分は何に対して壁を作っているかなど、自分の心の声に耳を傾けた。朝の澄み切った空気と、素晴らしい山々を前にすると、いつもよりずっと素直に自分を見つめることができた。

ある日のセッションで、レバノンから来た青年の話に心を大きく動かされた。彼は「自分はもっと平和な国に生まれたかった。明日、生きていることができるだろうかと思う。しかし、この国に生まれたのも、何かの目的があってのことだと思う。人生は素晴らしい冒険である。これからは、何のために生きるかということを考えていきたい」と話していた。私は彼の力強い前向きさに、思わず拍手を送りたいほどであった。

人は心の壁を作りやすいものである。しかし、壁を持つことは、自分を小さくし、将来を閉ざしてしまう。恐れの壁を捨てて、前向きに生き、心にゆとりのスペースを持ち、常に自分の心の声に忠実になることが大切だと思う。

世界中から集まった人々の話を聞いて、私は何と恵まれて生きてきたのだろうかと改めて感じた。と同時に、今まであまり問題意識を持たずに生活してきた自分を恥ずかしいとも思った。

後半は、オーストリアに近い田舎の方でホームステイをしたり、市内観光をしたりと、スイスを充分に楽しんだ。どこへ行っても美しい景色、そして、色とりどりの花が咲いていた。

諸国と手を取り合い共存していく時代

帰国する日が近づくと、毎日目にしていた山々や湖、そしてマウンテンハウスの長い長い廊下も多くの思い出があり、何とも複雑な気持ちになった。帰ることばかりを考えていた日々もあったのに、「スイスにきて本当に良かった！」と思った。長い間滞在していたので多くの人との出会いがあり、その数だけ別れのさみしさも味あわなくてはならなかった。それぞれの国に帰る人々は、その人なりに何かを得て、とても良い顔をして帰って行ったのが大変印象的であった。

書いて書いても書き足らないほど、今回のスイスでの体験は、私にとって大変貴重なものになったと思う。国が豊かになり、科学の進歩が著しく、情報があふれている世の中で、何が一番大切か、人間としてどう生きるべきかということを考えるのはなかなか難しい時代になっていると思う。なぜなら、明日は無事生きられるだろうかというような状況に私たちはいないし、このままずっと豊かな国としてあり続けるだろうと思う人は少なくない。したがって、何となく囲りの雰囲気に流されてしまうのだろう。しかし、これは大変危険な状態だと思う。現に、日本の経済は低迷し、回復の見通しも立っていない状況であるし、世界はどんどん変わっている。そんな中で、私だけは大丈夫と思っていながら、気が付いたら時代がまったく変わっていたでは遅いのである。自国のことだけでなく、諸国と手を取り合い、共存していく時代が間違いなく来ている思う。

私たちは、昔に帰って、ハングリーに生きる必要があると思う。そして、心の中に信じるものを持つことが大切なのではないかと思う。学生生活も後半を迎えたが、社会に出る前にもっともっと自分と向かい合い、問題意識を持って有意義に残りの学生時代を過ごしたいと思う。今は、スイスでの素晴らしい体験が、忘れられないものとなり、確実に栄養となったことに喜びを感じている。最後になったが、今回のスイス行きに関してお世話になった方々、コーでできた世界中の友達、そしてMRA事務局の皆様に感謝し、レポートを終わらせたいと思う。

●コー・スカラーズ・プログラムを受けた大学生たちと。左端はルームメイトのアメリカ在住の木村えりさん

MRA国際青年会議に参加して

今回の青年会議では、東西分割の象徴であったベルリンの壁崩壊後も、いまだに様々な要素で分断されている人々の心の壁に焦点があてられた。日本からは、小林祐子さん、荒井千香子さんらの他、関西日本・スイス協会より派遣された関西地区の中学生6名が参加した。

積極性から学んだこと

雑賀友佳子
文の里中学校

今回たった三日間でしたが、MRA国際青年会議に参加することができ、今までにない素晴らしい経験をしました。

一番心に残っているのは、やはり沢山の人と知り合えたことです。行く前には、青年という言葉から私達のような年齢層の人ばかりだろうと考えていました。でも、MRAでは様々な人種、国籍、年齢の人々が一緒になって生活していました。そんなことから、最初はこんな中で本当にうまくコミュニケーションできるのだろうかと不安でしょうがありませんでした。でも、その心境は初日のうちに解消されてしまいました。三時からのティータイムで、私の四倍以上も年を取ったクレアさんというおばあさんと対話することができたのです。考えてもいなかったことでしたが、私の話をとても熱心に聞いて下さいました。戦争のことや日本のこと、家族のことなど話が弾みました。同じように、沢山の人と年齢にこだわることなく、本当に自然に対話ができました。

二日目、三日目に参加したクッキングでは、人と話す機会がもっと沢山あり、フルーツを盛りつけたり、チーズを切ったりするのでさえ、とても楽しかったです。同じ係の人たちとはすぐに親しくなり、一緒に歌ったり、話したりしました。廊下ですれちがう人や隣の部屋のお姉さん達とも挨拶を交わし、MRAに来ている人みんなが、家族のように思われました。

そんな中でも、お互いの生活習慣をさりげなく尊重しているところが、食事などの生活面にみられ、とても素敵な場所だなあと感心してしまいました。

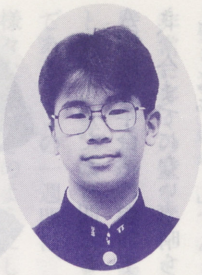
また、もう一つ心に残った出来事があります。ミーティングの最後にスピーチをしたことです。自分の番がくるまではとても緊張しましたが、いざ話し始めると、落ち着いた気持ちで堂々と話すことができました。約二百人程の前で、自分の意見を発表できたことは、大きな自信へとつながりました。また、そのおかげで、食事の際や廊下ですれちがう際に沢山の人が声をかけて下さるようになって、とてもうれしかったです。

MRAでは、積極性さえあれば、誰もが私達を受け入れてくれました。だから、私は自分の下手な英語で一生懸命気持ちを伝えました。すると、相手もそれを理解しようと一生懸命聞いてくれます。そんな中で辞書を引く回数が、少しずつ減っていくのにとても驚きました。でも、やはり言葉は大切です。沢山の人の中で言いたいことを最後まで伝えきれない自分がとてももどかしく思え、改めて外国語を勉強する必要を感じました。

でも、こんな私ですから、苦心の末にやっと相手が理解してくれた時の喜びも格別なもので、中学生の間に参加できたことをとてもうれしく思いました。会議などでも他国の問題に自分の目や耳で直接触れることができ、三日間で学んだことはとても大きかったと思います。

●8月1日のスイス建国記念日をホルンを演奏して祝う

心と心の交流の場



上山博司
花乃井中学校

こんな素晴らしいMRAですから、英語がもっとしゃべれるようになった時、必ずもう一度参加したいと思います。

MRAで本当に短い間でしたが、世界の数多くの人々とコミュニケーションすることができました。

MRAってなんだろうと初めは、少し不安な気持ちを抱えながらコーに着きました。そこで僕たちを待っていたのは、数多くの楽しさでした。それからは、楽しくて楽しくてしかたがない日々を送ることができました。

なぜならばMRAで会う人、みんなと友達になれたからです。初めの不安がどこかに消えて、片言の英語を使い、色々なことを聞くことができました。

また、青少年会議でも、人々がどんな気持ちを持っているのか、世の中を変えるために、どの様にしていけばいいのかなど、世界各国の人々の考えを知ることができました。

MRAでの色々な体験を通して、世界各国での出来事を肌で感じることができました。

この様に、みんなと心が打ちとけ合って話ができたのも、沢山の人々が僕をやさしく包んでくれたからだと思います。

ふだん、私たちが話している会話とは違い、お互いに心を開いて大きな心で話しあうことができたのも、このMRAで学んだことでした。

MRAに行って、何から何まで全てのことが良かったです。

短い三日間だったけれど、沢山の交流ができたのも一つであり、沢山の心と心で打ちとけ合って話ができた人々と友達になれたのも一つでした。

●青年会議では参加者によるロックバンドの演奏も披露された

また、MRAの夕食や昼食を作ったりするクッキングチームでも沢山の友達を作ることができました。

MRAで世界各国の人々が、世の中を変えるために、みんなで協力し合い、はげまし合っている姿を見て、MRAって本当に素晴らしいところなんだなとしみじみ感じました。

不安を胸に抱えていたのがうその様に消え、まだずっといたいという気分でした。短い三日間も僕自身にとっても大きな励みになり、これからの国際化時代への大きなステップともなりました。心と心の交流は、普通ではやれることのできない大きな体験であると僕は思っています。

世界中の人々が、真剣になって一つのテーマで話し合っている姿に、心を大きく動かされ、これから僕が成長していく上での励みになったのは間違いありません。

世の中を変えようとするならば、先ず自分から変わるということを、みんなを見て、学びとることができました。

心と心の交流の場を与えてくれたMRAやその関係の皆様に感謝します。

音楽は心をつなぐ

中田朱美
友渕中学校

私は七月二十八日から三十一日までMRAコー世界大会に参加しました。三日間という本当に短い期間でしたが、世界中の人と出会い、話し合ったりして、とても充実した時間を過ごすことができました。

マウンテンハウスに着くまでは、初めて自分の英語を試すことができる、と期待する一方、自分の未熟な英語でどこまでやっていけるだろうか、という不安も沢山ありました。

しかし、マウンテンハウスで生活している人たちは、まるでずっと前からの友達でもあるかのように、廊下などで出会うと「ハロー！」と誰もが声をかけてくれました。その様なことを繰り返しているうちに、いつのまにか不安はかき消され、自分からも「ハロー！」と声をかけられるようになりました。

マウンテンハウスで生活している人たちは、みんなとても楽しそうですが、とても悲しい過去を背負って

いる人や、今現在、自分の国で紛争が起こっている、という人も沢山いました。そのような話が出た時、話している人も泣いているし、聞いている人の中にも泣いている人も沢山いました。このように話している人と聞いている人とが一緒になって、一つの問題を考えるということは、とても素晴らしいと思いました。

マウンテンハウスで過ごした三日間は驚きと笑いの連続でしたが、中でも一番心に残っているのは、クッキングチームに参加したことです。十五人くらいのチームで、五百人分もの食事を作るのですから、忙しかったことは言うまでもありませんが、友達を作るのには絶好のチャンスだったと思います。同じ仕事をしていたら、いつの間にか話が弾んでいたということもありました。このクッキングの時にポーランドの女の子と友達になりました。その女の子が「スズキ・グループ」でバイオリンを習っていたと聞いてびっくりしてしまいました。なぜなら、私も少し前まで同じ鈴木鎮一先生の「スズキ・メソード」でピアノを習っていたからです。遠く離れた全然別の国で生活しているのに、その子を身近に感じることができ、うれしく思いました。三十日の夜には、国ごとに何か出し物をする機会がありました。私たちは「花」と「ソーラン節」を歌い、私はピアノで伴奏をしました。「ソーラン節」の時には、沢山の人が一緒に手拍子をしてくれました。私はその時、言葉は分からなくても、音楽には心を通い合わせる何かがあると、強く感じました。

三日間はあっというまに過ぎてしまいましたが、世界中の人々から沢山のことを学び、また楽しい思い出も数れ切れないほどできました。私はこれから、もっともっと英語を勉強し、またいつか必ず、MRAコー世界大会に参加したいと思います。

多くのことを学んだMRA

藤井 俊
八阪中学校

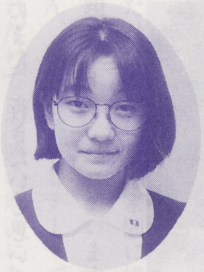
僕はコーでのMRA世界大会に参加するまでは、緊張と不安で胸がいっぱいでした。なぜなら、世界各国から集まってきた参加者の一人として与えられた役割を果たし、また全ての人々に英語で接していかなければならないからです。しかし、そのような不安や緊張がふっとんだのは、マウンテンハウスに着いから受け取ったプログラムの中に、スポーツの時間があったからです。僕はスポーツが大好きなので、この時間にスポーツを通じて友達が作れたらなあと考えていました。

そして、二日目の待ちに待ったスポーツの時間になったのですが、いざとなると足がすくんでしまい、正門の所で立ち止まっていると、ドイツ人の二十一歳の男性が「ドゥ・ユー・ライク・フットボール（サッカー）？レッツ・プレイ・フットボール」と話しかけてくれたので、僕は嬉しくなり、「オーケー」と大声で言ってしまいました。サッカー場に着くまで自己紹介などをして少し英語に自信がつきました。そして、着いてみるともうサッカーは始まっていて、みんなが僕の方を見たので自己紹介をぎこちない英語ですると、みんなが「スグル、スグル」と何回も呼んでくれました。しかし、そこには日本人がいなく、初めてこのような状況に直面したため、不安で頭が混乱しそうになりました。それもつかの間で、ふと気がついてみると、僕はみんなの中に溶け込んでいました。僕はここで言葉に関係なくできるスポーツのよさを知り、とてもいいことを教えられた気がしました。

他にも沢山交流できる場面、クッキング、各国の出し物、その他色々と日本ではできないような体験をマウンテンハウスでできて、とても嬉しく思いました。

僕はMRAに参加して、言葉は通じなくても、行動や一生懸命理解し合おうとさえすれば、国境など関係なく仲良くやっていけることを教えてもらいました。そして、MRAの活動は続けていくべきだと思い、またいつか参加しようと思います。

三日間…それは充実した日々



堀金由美
豊崎中学校

私は、七月二十八日から三十一日までの三日間、MRA国際青年会議に出席しました。行く前まではMRAという言葉すら耳にしたことがなく、何度も何度もMRAについて資料を調べました。世界各国から色々な方々が出席されると聞いて不安でいっぱいでした。自分の片言の英語がどれだけ通じるか、とても心配していました。MRAについて想像も付かないような恐怖と不安でいっぱ

いでした。

マウンテンハウスに到着して、ミーティングや食事の時に知り合った、ユーゴスラビアの内戦から逃れた青年や南アフリカの青年、又、イギリス人御夫妻、中国人の人達と、戦争や中国の自転車管理についてなど楽しく会話をし、とても貴重なお話を聞くことができました。

英語は自分なりに努力して少し通じましたが、半分は身ぶり手ぶりで辞書を片手に奮闘しました。たとえ言葉が不自由でも誠意を持って接すれば、どんな壁も打ち破れる事を学びました。まさしく、今回のテーマ「壁を打ち破れ」を実際に学べたので大変よかったです。

私達は自己紹介をして日本の歌をいくつか紹介し、沢山の手拍子と拍手をもらいました。私達の歌に合わせて一生懸命に手拍子を打って下さる人の姿を見て、とても感激しました。

分科会の人達と二日目の昼食と三日目の夕食を作りました。それぞれ約五百人分と、とてもびっくりしました。その間に色々な人とおしゃべりをして、交流を深め、そして楽しく食事をしました。今でもその時の味は忘れられません。

言葉では十分ではありませんでしたが、協力し理解し合えば争いのない国ができ、どの様な所も色々な人達と仲良く出来る事を、このわずか三日間で学ぶ事ができました。

私にとってMRAは恐怖が一転して、好奇心となり、もっと予備知識を勉強しておけばよかったとつくづく思いました。又、是非、今度は両親といっしょに参加したいと思っています。

お世話になった方々、ありがとうございました。

一刻千金

原田愛香
扇町中学校

MRA国際青年会議。初めて名前を聞いた時には、かたくて真面目そうな雰囲気に思え、たちまち不安でいっぱいになりましたが、参加してみると日本ではできないような、貴重な体験をする事ができ、行くまでの不安が、喜びや楽しさに変わっていました。私は、今まで外国人と触れ合う機会がなかったので、そういった面でもこのマウンテンハウスで過ごした三日間は印象深いものになりました。

初めてミーティング（分科会）に加わった時には、通訳を通して意味は理解できたものの、内容は難しく感じました。しかし、それぞれの人が自分の意見を持っていて、積極的に意見を交換し、討論しているのは素晴らしいことだと思いました。今の日本では、このように討論できる場所は少なくなっていると思います。学校でも、むずかしいなどを理由に、自分の意見を言わない人がほとんどです。活発に討論が進む中、私も意見を言えたことが一番うれしかったです。討論といえば、かたいイメージがありますが、楽なスタイルで自由に意見を出し合っているので、かたくなる必要はありませんでした。だからこそ、あんなに意見が言い易かったのかも知れません。

そして、他国の人との交流をさらに深めることができたのは、MRAに参加している人全員の食事を作るクッキングでした。そこでは、色々な国からきた人が、十数名程で一つのグループを作り、忙しい中でも、おしゃべりをしながら五百人くらいの人の食事を作ります。話すまでの緊張感と、話せた後の満足感は、いつまでたっても忘れられません。最後の夜の各国からの出し物で、私達が歌った時に、みんなの手拍子が一つになったのも感激でした。

日本語の通じない生活を初めて体験し、自分の持っている英語力と表現力だけを信じてお互いに顔を見て、理解しあおうと努力すれば、心は通じることを知りました。三日間という短い間でしたが、私が得たものは、非常に大きく価値のあるものだと思います。今しかできない貴重な体験をする事ができたマウンテンハウスにまた、行きたいと思います。

●会議の合間にはバレーボールなどのスポーツを通しての交流も

経済ジャーナリスト
コーでの一週間

出会い・発見、そして勇気づけられ

日本経済新聞論説委員
和佐 隆弘

わさ・たかひろ　1938年徳島県生まれ。早稲田大学第一政経学部を卒業後、日本経済新聞社へ入社。東京本社証券部次長、大阪本社証券部長などを経て、87年3月より論説委員と編集委員を兼ねる。90年3月から日本経済研究センター大阪支部所長も兼任。

家族と共にコーで過ごした価値ある一週間

ほんとうに楽しく、そして価値のあるコーでの一週間でした。八月十九日からの「産業人会議」と二十二日からの「円卓会議」に参加し、多くの出会いがあり、発見があり、そして何らかの貢献をすることができたのではないかと感じたからです。

新聞記者を三十年も職業としてきた人間ですから、そんなことは当然といえば当然と思われるかも知れません。しかし、これまで何回か欧米へ取材旅行をしたのとは、今回は決定的な違いがあったのです。その一つは、日本経済新聞社という組織の一員としての仕事ではなかったことです。つまり、夏休みをとって出かけたものだということです。しかも、コー世界大会への参加の目的は、新聞記者として取材旅行に勝るとも劣らない〝職場〟に立ち会うことだったからです。

もう一つあります。それは、家族で出かけたことです。わが家は妻と一男二女の五人家族ですが、妻美和子と息子の健介が参加してくれました。二人とも海外旅行は初めての体験です。それに、ドイツのフランクフルト在住の妻の妹、シュレーダー美枝子も加わってくれました。夫として、父として、そして義理の兄として、経済大国を誇る日本の人間として当然の義務の一端を果たすことができたように思うからです。

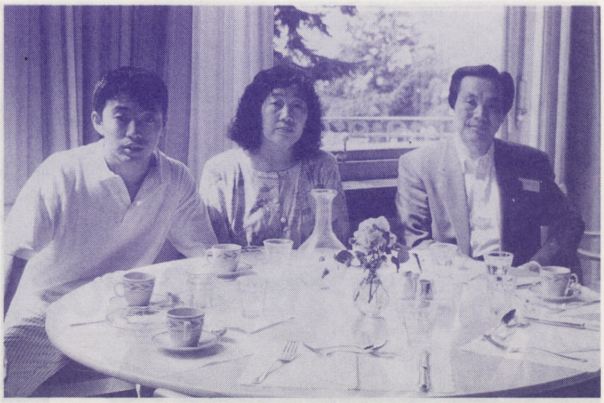
新聞記者とは社会の木鐸だ、とよくいわれます。それだけの使命、義務があるわけです。それと同時に、それに対応する何らかの特権も社会から認められています。その点に関しては、一般の社会人とは違ったところがあるわけです。〝会社社会〟といわれる日本の現実にあっても、〝会社人間〟であることが許されないはずです。よき市民でなければならないわけで、そのためには、よき夫であり、父でなければならないと思っていました。今回は、初めてそのマネゴトをすることができました。妻たちには大変な精神的緊張を与えることになったと思いますが、それによく耐え、むしろ感謝してくれました。人間的な成長の喜びを味わってくれていることでしょう。

私ごとに関することが長くなりました。普通ならこんなことを冒頭に書くのは遠慮しなければならないのですが、MRAの機関誌には許されるのではないかと思います。MRAに対する私の勝手な解釈ですが、今回参加して、その感を一層強くしたことでもあるのです。

MRAは〝人間的関心〟を深める数少ない場

先進国首脳によるサミットや経済大国によるG5とかG7といった会議は、政治・経済・国際紛争といった社会的関係や国家間に横たわる問題がテーマにされています。もちろん、緊急を要するテーマですが、それだけでは問題の解決になっていないことも事実です。

社会的関係における問題は、実はその社会を構成している人間一人ひとりがかかえている問題と密接につながっています。宗教や哲学にかかわる問題ですから、社会的に議論しにくい分野であることは確かです。しかし、地球が狭くなり、それぞれの民族や国家が好むと好まざるとにかかわらず、相互に影響し合うのが、今日の人類社会の現実です。とすれ



●コーのダイニングルームで奥さん息子さんと

ば、それら民族や国家を構成している個人個人のあり方、つまり人間的関心を深める以外に、問題解決の道はあり得ないわけです。

ところが、こうした〝人間的関心〟を深める場は、あまりにも少なすぎます。日本の国内もそうですが、今やあらゆる問題は、地球環境問題一つをとってもわかるように、人類共通の課題になっています。国際的な連帯を抜きにしては、議論は成立しない時代です。

そして、問題の解決のためには、まず問題を世界中から持ち寄ることが不可欠です。それを共通のテーブルの上に出し合い、事実を認め合うことが、真の問題の発見につながり、それが解決の糸口になるのです。MRAは〝人間的関心〟から目をそらさずに、社会や広く国家間に横たわる真の問題の発見を目ざそうとする、数少ない〝場〟だと思います。

深い感銘を受けたフィリップス氏のお話

ほんとうに多くの人々に出会い、いろいろな意見を聞き、議論をしました。知らなかった事実を教えられ、大小さまざまなものの見方や考え方を知りました。最大の驚きは、オランダの電機メーカー・フィリップス社の元会長フレデリック・フィリップスさんのお話です。

それは、二十三日の昼近いことでした。「産業人会議・円卓会議共同プログラム」で、八十七歳という高齢のフィリップスさんがステージに上がりました。そして、「私のひいおばあさんのお姉さんの息子がカール・マルクスです。そんなことから、私の祖父も父も社会のことに関心を持っていました。祖父がロシアの友人にランプを売りに行ったとき、いつも『また明日来てくれ』といわれるので、不思議に思ったのですが、その原因はおカネがないからだったのです。イトコのマルクスの影響が悪かったのだと感じた—そんな話を聞かされたことがあります」というお話です。

これは、ロシア科学アカデミー哲学法律研究所のウラジミール・スプラン教授が「市場経済に関する倫理的展望のロシアと米国の比較」というテーマで講演したのを受けたものです。スプラン教授は、倫理的基盤を欠いたままで市場経済にチャレンジしている現状を訴えました。その中で、物質的な価値を中心に置き、イデオロギーに走りすぎた、マルキストの罪である。政治的自由ばかりでなく、ビジネス文化が欠落してしまった—などと語っていたのです。

フィリップスさんは、先の話のあと、こう続けました。「私は若者にこう言っている。地球に起きていることに責任を感じること、そして親やじいさんのあやまちを正して行って下さい」と。そして、この日から、一週間後に最愛の奥さんが亡くなられました。MRAの運動にとてもご熱心だった奥さんの心からのさけびでもあったのではないか、今、この原稿を書きながら、思いを新たにしています。フィリップス夫人のごめい福を心よりお祈り申し上げます。

経済ジャーナリズムの重要な役割

「産業人会議」の統一テーマは、「市場経済に必要な道義的基盤」というものでした。ここでは、九つのフォーラムに分かれていて、そのうちの「コミュニケーション産業—自由社会の原動力」をテーマとするコミュニケーション・フォーラムに参加しました。十六カ国から約六十人が、四日間にわたって情報交換し、意見を出し合いました。

「情報におけるマスメディアの役割」、「エンターテイメントとマスコミ」、「教育とマスコミ」などについて、基調報告があり、それをもとに台に、

●「市場経済の倫理的展望—ロシアとアメリカの比較」について共同講演を行なったハロラン教授（アメリカ、右）とスプラン教授

●産業人会議（コミュニケーション・フォーラム）で発言する

フォーラムは進行しました。これといった結論が得られたわけではありませんが、事実そのものとともに、いろいろなものの見方と、その背後にあり、それを支配している〝価値観〟の発見がありました。今後の取材や報道に生かせると思います。私にも何度か発言の機会がありました。東西の冷戦構造が終わり、世界はボーダレスな経済競争の時代に入っていることは、周知のことですが、それだけに競争のルールのあり方が重要な意味をもってきたわけです。個人や企業や国家間の自由な競争が、社会や世界全体の繁栄や福祉の向上に結びつかなければなりません。そういう観点から、日本はもちろん、特に世界経済に影響力の大きい国々の〝現実〟を分析し、その成果を世界の〝公共財〟にする必要があると提案しました。

その場合、もっとも大事なのは〝悪貨は良貨を駆逐する〟というあの有名なグレシャムの法則が支配していないかどうか、現実を直視することだと強調しました。もし、グレシャムの法則がまかり通っていたら、不況→失業→インフレになったり、ダンピング→貿易摩擦などと、経済〝戦争〟につながるからです。

そうならないようにするのが、政府・国家の役割、使命です。政府にその役割を全うしてもらうためには、その経済社会のメンバー全員が、正しい経済情報を持っていなければなりません。そこに経済ジャーナリズムの重要な役割があります。時には、政府批判にもなりますが、ほんとうは、政府が民主主義的な手段で合理的な経済政策を成功させるために不可欠なことなのです。統一テーマとしている「市場経済に必要な道義的基盤」にほかなりません。

新たな勇気が湧いた素晴らしい人々との出会い

もう紙数がオーバーしています。どうしても書いておかなければならないのは、ラジモハン・ガンジーさん夫妻のことです。インド独立の父、マハトマ・ガンジーさんのお孫さんです。珠玉のような発言に何度も接しましたが、それ以上に感動したのは、その誠実さと誰ともわけ隔てなく接する謙虚で寛容な姿です。すばらしい人に出会えて、新たな勇気がわいてきました。生きている喜びです。

「円卓会議」は、経済ジャーナリストとして、つまり、職業的な観点から、得がたい機会でした。すでに九月五日の日本経済新聞のコラム「大機小機」に「経済人の政治的感覚」と題してその一端を記したほか、くわしくは、日経ビジネス誌（十月五日号）の「スペシャル・リポート」にまとめました。

最後にどうしてもつけ加えておかなければいけないことがあります。私はもとより、妻や息子が、かつてなく楽しく充実した一週間をコーでもつことができたのは、MRAの皆さんの献身的な努力と訓練された能力のたまものだった、ということです。多くの外国人との会話を通訳していただき、感謝の意を表さずにはいられません。

●産業人会議（コミュニケーション・フォーラム）で発言するラジモハン・ガンジー前上院議員（インド）

「MRAの歴史」のビデオ（ベータ・VHS）

頒布中

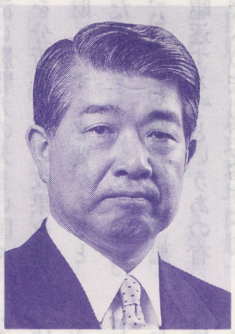
頒価2,000円（送料込）

詳しくは事務局までお問い合せ下さい。

03(3821)3737

レポート

コー産業人会議に再び参加して



相賀 照則
東芝常務取締役

あいが・てるのり　1936年生まれ。東京大学法学部卒業後の59年4月に東芝へ入社。人事教育部長を経て92年4月に常務取締役に就任。相賀氏のコー産業人会議への参加は80年に次いで今回が2回目となった。

本当の相互理解は人間的ふれ合いから生まれる

東芝労使によるコー産業人会議への参加は、今年で十五回目となった。これまでに、東芝から八十人以上の参加者が、世界の産業人と、直接率直に意見交換することによって、民間レベルでの相互理解と相互信頼の形成に、いささかなりとも貢献できたものと思っている。そして、東芝にとっては、数多くのメンバーの貴重な体験が、企業内の労使関係の安定と向上に大きく寄与してきたと確信している。

今回は、日本からは四人、これに欧州の現地法人と事務所に出向駐在している二人を加え、六人で参加した。東芝も海外の関係会社が七十社、日本人の出向者が六百人を超え、現地従業員が二万五千人となっている。一方、日本の東芝でも外国籍従業員が百二十人となった。労働組合にも、一年半の海外留学を終えた中央執行委員が加わっている。日本企業自身がグローバライズする中で、今回海外駐在員が加わったことは、今後の新しい展開を示唆するものとして、一歩前進と考えている。

ここ数年、欧米からの参加者に、日本に対する偏見、誤解そして恐れがある旨がかっていたので、少しでもそれらの解消に寄与できないかと考え、参加することとした。先ず、昨年制定した（1）顧客志向、（2）適性な利益の確保、（3）人を大切にする、（4）国際化の推進、（5）グッド・コーポレート・シチズン、（6）価値の創造、（7）資源・環境問題への貢献、この七つのキーワードからなる十一カ国語で書かれた「東芝グループ経営理念」を具体的に述べた後、企業としても、個人としても、グッド・コーポレーション・シチズン即ち良き企業市民としての行動をモットーとしていることを強調した。また、会社生活での自己表現と達成感を基本としつつも、個人生活での充実感も大切である。そこで、この両者の両立を求めていることを主張した。更に、労使ともに競争と強調、共生の重要性を強く述べた。加えて、その具体的な一例として、ウィーンで活躍する若い小倉さんから率直に体験を発表してもらった。小倉さんは、東芝交響楽団の有力メンバーであるが、月光の中での「アルルの女」などのフルート独奏は、聴衆に感銘を与えた模様であった。

お蔭様で、自制する企業の姿勢、人間尊重の精神は、丁度ミネソタ大学の方々の提言と概ね一致することとなり、共感を呼ぶことができ、また芸術を深く愛する日本人小倉さんの公私にわたる率直な発表は、日本人への恐れを和らげる効果があったと思っている。当り前のことではあるが、本当の相互理解は公式の場での理詰めの応酬からではなく、個人ベースでの人間的なふれ合いから生まれると信ずるものである。

企業活動や個人生活の中で実践すべきMRA精神

私自身が最も興味深かったのは、ロシア科学アカデミーの教授の率直な状況分析と提言であった。「国家万能、力の哲学、経済は計画であるという体制が崩壊している。共産党は

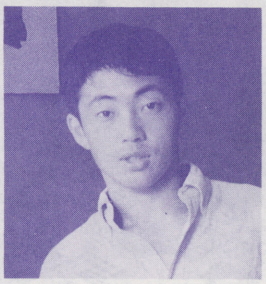
●イギリスの参加者たちと食卓を囲んで交流する東芝代表団

ロシアの文化を破壊した。しかし、熱意、高い質の教育がある。精神的なものに価値を見い出す、崇高な自己犠牲の精神、忍耐というロシアの文化にはすぐれた一面がある。目下は急激な変化のため、政治文化もビジネス文化も欠如し、混乱している。しかし、険しいが必ず道はある。すぐに行動を起こしたい。」この冷静だが力強い発言に深く感動した。しかも、このロシアの学者をアメリカの学者が友人として紹介したのであった。ここにMRA運動の真髄を見た気がした。

帰途、モントルーからジュネーブまでの列車で、食事で一緒になった米国の企業人と談笑できたのも良い体験であった。ともすれば、日本社会の中、企業社会の中だけで生活しがちであるが、国籍を超えた友人と率直なお付き合いをすること自体が、理屈抜きに必要だとの感を深くした次第である。第二次大戦後、講和条約締結前に、友人として日本代表を招いてくれた唯一の組織MRAの広い精神に四十年たった今も改めて感謝するとともに、今度は私どもがこの精神を継承し、国際的な企業活動や個人生活の中に実践していかねばならない。これが十二年目、二度目の産業人会議参加の感想である。

コー印象記

和佐 健介



最も印象に残った「コー円卓会議」

八月の半ば頃、MRAコー世界大会に参加した父に同行して、母、叔母と共にコーを訪ねました。僕にとっては初めての海外旅行で、多くのことを学びましたが、最も印象に残ったのは、「コー円卓会議」を傍観したことでした。

今回は七回目を迎える「コー円卓会議」は、日米欧の経済人が相互の経済関係に建設的かつ抜本的変革をもたらすと共に、その他の地域に対する日米欧の共同責任を速やかに果たすことを目指すものだそうです。約三十人の方々が参加しておられ、それぞれの立場から率直な意見を交わしていました。

キヤノンの賀来龍三郎会長がトップバッターとして「共生」の理念を発表されていました。もはや先進諸国に追いついたにもかかわらず、未だに「追いつけ、追いこせ」でやっている日本の現状から脱し、世界に尽くす国になることが「共生」の出発点になるべきであるとおっしゃっておられました。

実際に経営に携わった経験から得られたのであろうこの理念と、将来に対するビジョンは大変興味深いもので、議場でも多くの共感を得ていたようでした。

また、経済摩擦の現実を念頭においたお互いの認識、対応策、不満、要望といったものが、次々と議論の場にのぼりました。その中で気付いたことは、相互の現状に対する理解が不十分な点が多々見られたということです。特にこれは、「日本VS欧米」という図式において頻繁に見られました。日本側には「良い物を安く売って何が悪いのか」という疑問は根深く残っていますし、「なぜ日本のマーケットが閉鎖的だと言われるのか理解できない」というような意見も述べられていました。また、欧米側からは、「日本では欧米の製品は劣っているというイメージが存在する」という、外国製品好きの我々には、ちょっと信じられない発言もありました。

日本の抱えている巨大な黒字という、全くの数字上の判断からか、日本が非常に豊かな国だと考えている方が、欧米側に多かったのには驚か

●円卓会議夕食会で。キヤノン賀来会長（左から3人目）とコーMRA財団グランデー理事長（右に2人目）

されました。実際には、ウサギ小屋に住み、アリのように働いているとまで言われたことさえあり、豊かさを実感している人はまれといえるでしょう。日本の首相が「生活大国」を目指すなどとは言ったものの、目の前の不景気にそれどころではなくなっている事実を知っている方など少ないように見受けられました。海外へ来てみて、日本で大多数といえる中流階層の人々よりヨーロッパの人々の方が、生活の全てを総合した快適さの水準では高いものを享受しているように感じます。

価値ある大きな課題を見つけた思い

日本とアメリカ・ヨーロッパを中心とする諸外国との貿易その他の摩擦の存在は、テレビや新聞等で知っていました。しかし、それを責任ある立場の人々が直接議論する場をマスメディアというフィルターを通さずに、生で拝見できるという大変な幸運に今回巡り合えたわけです。そこで感じたのは、日本と欧米の間では依然として解決の糸口さえ見つかっていないということです。しかし、ソビエト連邦が崩壊し、冷戦終結後の新たな秩序が求められています。世界を精神的にも、経済的にもリードしていかなければならないアメリカ、ヨーロッパ、日本が一刻も早くこの壁を乗り越え、共に手を携えていかねば、結局、共産主義のみならず資本主義さえも歴史に淘汰されざるを得なくなるでしょう。僕たちは日本を、二十一世紀を、いやがおうでも背負っていかなければならない世代です。政治学を志す学生の一人として、研究すべき価値のある大きな課題を見つけた思いです。

人種や国籍、地位や立場を超えた交流

一週間ほどのコーでの滞在中には、皿洗いや野菜の皮むきなどのボランティア活動にも加わりました。また、大食堂の食事でもインドのマハトマ・ガンジーの孫にあたるラジモハン・ガンジー氏や、元英国国連公使のアーチー・マッケンジー氏を初めとする様々な人と直接言葉を交わすことができました。兵役の代わりにアフリカでのボランティアを志願しているフランス人の工学部学生やミャンマー（旧ビルマ）から命からがら脱出した青年とも親しくなりました。周りでも人種や国籍、地位や立場を超えた交流が繰り広げられていました。

そうした体験から実感したのは、アメリカ、アフリカ、ヨーロッパの人々の間にはその歴史的背景から当然のように存在する文化的同質性を、我々は待ち合わせていないということです。そこに、日本と諸外国との相互理解の困難さと摩擦の原因があるような気がします。それに気付かずにいる間は、この問題の根本的解決は不可能だといえるでしょう。MRA世界大会のような、種々雑多な地域の種々雑多な立場の人々が集い共に生活するような機会を得ることは、日本人にとってこそ有益なことです。と同時に、これからますます必要なことだといえるのではないでしょうか。

●ミャンマー（旧ビルマ）の青年たちと懇談するマッケンジー元英国国連公使（左から2人目）

MRAビデオのご案内

日本語吹替版
（VHS/ベータ）

好評頒布中！

明日を愛するがゆえに

第二次世界大戦後独仏和解のきっかけを作った ―イレーヌ・ロー夫人の生涯―

ドイツを仲間外れにして
ヨーロッパの再建ができますか？

頒価5,000円
（郵送料サービス）

お申し込みは
MRA事務局へ
03(3821)3737

第七回コー円卓会議レポート

日米欧―競争と協調の新しい道

■場　所：スイス、コー・マウンテンハウス

■日　時：一九九二年八月二十三日(日)～二十六日(水)

●●●日米欧財界人コー円卓会議●●●

貿易摩擦の激化と海外での日本のイメージの悪化を懸念したフレデリック・フィリップス氏（オランダ）とオリビエ・ジスカールデスタン氏（フランス）が提唱し、第１回日米欧財界人円卓会議が86年８月にスイス・コーのマウンテンハウスで開催され、本年、７回目を迎えた。

第七回コー円卓会議は、八月二十三日から二十六日にかけて、スイス、コーで開催された。今回は「日米欧―競争と協調の新しい道」のメインテーマのもとで、

(一) 不均衡や緊張の減少、

(二) より公正な競争の達成、

(三) ＣＩＳ（独立国家共同体）の経済転換への貢献、

(四) 経済成長と雇用の回復、

(五) 経済紛争回避のための国際企業の役割、

以上を優先課題として議論が進められた。今回は従来に較べて欧米製造業からの参加者が多く、激しく変化する国際情勢と激化する競争の中での「共生」を目指した建設的対話が繰り広げられた。

一、失業救済を掲げて台頭したヒットラー

「高い生産性に加えて、安売り競争などを駆使する日本からの進出に対抗するには、人を減らすしか方法がない」、「日本による進出も経済成長時には容認できたが、不況と失業をかかえる今では受け入れる余地がない。我々のやり方を妨げないで欲しい。『共生』の精神を失業問題にも適用して欲しい…」とドイツやフランスの参加者が初日に訴えた。「ジャパン・バッシング」というよりも、失業がヨーロッパ最大の社会問題であり、日本の進出と関連して「政治化」していることへの警告と恐れの吐露である。

これに対してネッスル社のマーハー会長（スイス）は、「失業は構造的、かつ心理的問題である。需要の変化に応じて雇用動態が変化する。古い仕事を守ろうとするのではなく、新しい仕事を創出し、新しい技術を持った人を教育することである」という建設的な提案を行った。

一方、フィリップス社のフィリップス元会長（オランダ）は、「大恐慌のあと、ヒットラーはドイツ三百万人の失業者に職を与えると約束をして権力を握り、その結果欧州全体に惨禍をもたらした。大戦後、我々経済人が先頭に立って、政治家や労組代表とも協力して雇用創出に全力を注いだが、最近はその職がどんどん失われている。しかも、現在の失業対策の難しさは、高額の失業保険以上の収入をもたらす仕事を与えなければならないことだ」と述べ、失業問題の政治的、歴史的重要性を自らの経験に基づいて力説した。更に、「最近は日本も不況になって、やっと我々と同じような問題に取り組まざるをえなくなっているのは良い傾向

と喜んでいる」と心境を語り、世界的問題に対する共同の取り組みを呼びかけた。

日産自動車塙副社長は、「ロシアや中国、インド、更にはアフリカ諸国等、我々が支援すべき国は多い。途上国では飢えに苦しむ人も多く、先進国の生活水準で考えれば、ほとんどが失業者と呼べるかも知れない。我々先進国内の失業者よりも、こうした生死にもかかわる途上国の失業の問題について、日米欧が共に取り組んでいくべきではないか」と高次元からの対応を呼びかけた。

二、黒字の評価と重商主義

世界の経済成長促進の必要性と併せて、日本の黒字も論議の的となった。日本側からは、最近の黒字拡大の主因である輸入の減少には、原油価格の値下がりや不況による宝石や絵画などの輸入減少の影響が大きいといった説明と共に、黒字は金融機関による海外融資等で相殺される面もあり、貿易収支だけでなく資本収支の動向も考慮されるべきとの点が指摘された。

また松下電器の豊永専務が、「現在黒字国である日本と台湾の黒字は、世界貿易全体（四兆ドル）の三%に過ぎず、これは世界貿易の拡大に必要である。他国の黒字を貿易だけによって除去しようというのは十七世紀の重商主義的発想である」と述べると、スタンフォード大学のハウエル教授は「黒字が悪いというが、債務国があればそれを助ける債権国が必要である。G7唯一の債権国である日本の黒字を政治的理由だけで減らそうとすれば世界全体が打撃を被ることになる」と黒字有用論を唱えた。更にイギリス化学産業協会コックス理事長は、「英国の化学業界は対日黒字であり、対日輸出が可能であることを証明している。黒字よりも、保護主義と孤立主義こそが我々全体の敵である」と続けた。

しかし、ヨーロッパ経営大学院のジスカールデスタン副理事長（フランス）は「黒字そのものが問題というよりも、貢献できる機会を奪われた赤字国が多いことが問題である。しかも力が赤字国から黒字国に移って黒字国の支配を受けることになる。バランスが重要であり、黒字が一部に偏るのではなく、リーダーシップを分かちあうべきである」と述べた。

ドイツの参加者の「黒字を抱えたドイツがバッシングを受けなかったのは、特定の外国市場の一方的征服をしなかったためだ」という指摘と共に、日本が一人勝ちする経済システムそのものに対する警戒が根強いことをうかがわせた。

ジャパン・タイムズ小笠原会長（ニフコ社長）は、「長期的には生産拠点の海外移転を図ると共に、市場開放や規制緩和を含む日本の改革を大胆に進めていくことに尽きる」と締め括った。

三、公正な競争と国際的なルールづくり

日本からの進出に関連して「公正な競争の原則とは何か、またそれをいかに実現すべきか」という議論もなされた。「日本は国内市場を閉鎖する一方で、アンフェアーな競争を仕掛けてくる」というヨーロッパ側の指摘に対し、塙副社長は、日本側に海外市場を支配する意図などは無いことを、敗戦直後からの日本人の心情や経済復興の歩みなどを通して説明した。そして「日本市場が閉鎖的とは思わないが、価格競争等が厳しいことが外国企業の参入を難しくしている」と述べた上で、「各国のルールを日本は順守してきたが、それでも欧州の不利は変わっていないことが問題だ。従って、まだルールになっていない国際的な慣行等をルール化することが必要である。同時に、

●ジスカールデスタン氏（フランス、右）と談笑するネッスル社マーハー会長（スイス）

●コー円卓会議恒例のクーパー氏（イギリス）のプロ並みの手品の腕前

それらの審判をする独立機関の設置も一案である」と提案した。（21ページ参照）

一方、日本からの輸出の四十％以上が既に管理貿易だという指摘と共に、「戦後ヨーロッパは、価格の計画経済と外からの競争にさらされた産業の保護政策をとってきた。最近〝フェア〟という言葉が益々保護主義的意味合いで使われているのは危険である」（プロコルディア社イベロート相談役（スウェーデン））や、「自由貿易とは、いかなる理由によっても、効果的な者がその効率を妨げられてはならないということである。保護主義に反対する一方で、経営改革や効率を上げることが必要だ。生産性の向上こそが富の創造につながる」（マーハー会長）といった意見が出された。

経済同友会河合専務理事は、「共産主義の崩壊は人類全体のおごりを警告している」というチェコスロバキアのハベル前大統領の言葉を引用して、人類全体が反省の時を迎えていることを説くと共に、「経済発展の歴史の中で、常に新興国が後発の利益を生かして先発国にとって代わるという歴史だけが繰り返されるのではなく、新しい共生の精神によるルール・ブック作りを行ってはどうか」と提案した。また「フェアな競争とはもっと社会的責任を担うことである」（本田技研岡村常任相談役）という発言や「七十年前のルールや規則も残っている日本のしくみの改革も必要である」（小笠原会長）という指摘もなされた。

四、競争と協調を両立させる「KYOSEI」

二日間を通して、こうした議論の根底に流れたテーマは、あらゆる角度からいかに真の「共生」を実現できるか、という問いかけであった。円卓会議初日の冒頭でキヤノン賀来会長は以下のように述べた。

「日本で昨年以来高まった『共生論議』に対して最近反対論が相次ぐようになった。『共生はカルテル』といったアメリカ側の発言に続いて、日本国内からも『手心を加えた競争』、『消費者不在の八百長御免』といった批判が出ている。自分が共生論を言い始めたのは十年以上も前で、社会の批判を浴びていた企業のあるべき姿を、（一）従業員との共生、（二）各種ステークホルダーとの共生、（三）コミュニティーとの共生、（四）世界との共生と、企業進化論に対応した形で整理して提唱した。これらはバランスシート的な発想ではいわば『分配面』（貸し方）での共生であるが、これだけでは『きれい事』との印象を与えて、前述の批判の一因ともなっている。そこで企業本来の役割に戻って富の『創造面』（借り方）からの共生を次のように整理した。第一はイノベーターとしての企業が世の中にないような技術、製品、組織、販売網等についての創造を行うこと。第二に、こうした創造を効率的に行うには政府などの保護を受けずに独立性をもって行う。第三は公正な競争を行うことである。集中豪雨的輸出をもたらすような『過当競争』も、談合に代表される『過少競争』もこれに反する。そして、少なくともこれら三つを満たした真面目な企業同士が、弱肉強食的な競争だけによってつぶし合いをしないような共生が必要である。例えば我が社は外国の競合企業との提携では自己資本を五十％以下にして、技術等を供給するという共生を実践している。つまり企業は創造面で全力を尽くし、分配面で世界に貢献するというのが真の共生である」

これに対して欧米参加者から熱い反響が寄せられると共に、二日間にわたって「KYOSEI」という日本語を使って様々なコメントが出された。「生産が増えても雇用創出につながらず、不況でありながら競争が激化している現状の中で、雇用を創出できるような共生が必要だ」、「世界との共生よりも先ず競争をしている企業同士の共生が最優先」、「ステークホルダー間の共生が重要」、「市場を開放して競争を導入することと、社会的、環境的、倫理的責任とのバランスが重要」といった具体的指摘である。

◉「共生」の理念と新企業像（賀来・キヤノン会長が提案した概念図。1992年8月24日）

企業の役割――バランスシート的とらえ方

	創造面［借り方］ 富の創造者としての企業	分配面＝共生［貸し方］ よき社会のつくり手としての企業
1	イノベーター （企業本来の役割）	第1種企業 （資本主義的企業）
2	自立 （政官財癒着からの脱却）	第2種企業 （運命共同体的企業）
3	公正 （不公正，過当・過少競争からの脱却）	第3種企業 （ローカルな社会的責任を果たす企業）
4	共生 （競争企業との共生）	第4種企業 （真の社会的責任を果たす企業）

そして日本経済新聞和佐論説委員は、「アダム・スミスが指摘したように、利害が交錯する市場こそが経済活動と富の創造の原点である。その市場が現在、悪貨が良貨を駆逐できるように歪んでいることが根本的問題である。民主主義と同じように、このこわれやすい市場を各自が自分に都合よく使うのではなく、犠牲を払って正すことが急務である。共生や公正な競争を実現するにはこの公正な市場を確立することである。それにはかつてのように一国家や一地域を対象とした市場ではなく、全世界が一体の市場となったという認識の転換が必要である」と述べ、過当競争と過少競争の併在を許す、日本の経済システム全体にメスを入れることが共生の最大の課題であると総括した。

五、ミネソタの企業理念

日本からの「共生」についての提案に呼応する形で、アメリカ、ミネソタ州の参加者から、公正で誠実なビジネスを推進するための企業理念の発表がなされた。（22ページ参照）これは北米文化のユニークな倫理的価値観を反映したものであるが、異なる価値観を越えて、世界中の経営者に受け入れられる基準作りを目指したものである。

トップマネージメントパートナーシップ社のクーパー会長（イギリス）は、コー円卓会議が刺激になって六年前にビジネス倫理協会を設立したと述べた上で、当時は調査した大企業五百社のうち五十五％しか企業コードを持っていなかったが、現在では七十三％にまで増えていることを紹介した。

住友電工の住友顧問は、「住友グループは四百年にわたり、信用第一、浮利を追わず、道義を先に、利益を後に、といった理念に基づいた経営を続けてきた。例えば、公害を無くすために銅の溶鉱炉の煙突を高くしたり、海上沖合に移動したりという努力を早くから行ったり、大阪市内を指さして『あれもうちの工場の煙、これもうちの工場の煙』と得意がる部下の説明に対して、住友本社の社長が『これは私の罪です』と語って反省したといったエピソードは数限りないほどである。十六代にわたってこうした姿勢を貫いてきた現当主の住友吉左衛門はMRAに会って、戦後日本の過去の行いを詫びて国際社会の責任を重視する姿勢を貫いてきた。それが近年バブル経済の中でグループ企業によるスキャンダルが生じたのは痛恨の思いである。そうした反省を踏まえ、基本理念は変わるべくもないが、時代の変化に応じた地球社会の一員としての考えを加えて新しい時代の企業姿勢を示す指針を作成中である。こうした企業姿勢が公正な競争の基盤である」と述べた。

岡村常任相談役は、こうした理念がアメリカから提案されたことの意義を賞賛したが、日米民間経営者同士による波長の合った共同作業の始まりとなった。

一九九三年の中間会議（キャンペーン）は四月十八日から二十一日にかけて日本で開かれることになったが、こうした流れを踏まえて、真の「共生」を可能にするための変革についての対話が続けられる予定である。

（終）

●円卓会議夕食会でスピーチするキヤノン賀来会長

●右から、本田技研岡村相談役、ガンジー前上院議員（インド）、住友電工住友顧問、ガンジー夫人、住友夫人

第七回コー円卓会議に参加して

―叩き合いでなく話し合いの精神で―

塙　義一
日産自動車副社長

はなわ・よしかず　1934年東京都生まれ。東京大学経済学部卒業後、57年4月日産自動車株式会社入社。企画室長、常務取締役、米国日産会長等を歴任し、91年6月取締役副社長に就任、現在に至る。

「奉仕の精神」を強く感じたマウンテンハウス

コー円卓会議日本側メンバーのお一人から、スイスで会議をやるのだが自動車の話題が出るので参加しないか、山の中のいい所だよ、と誘われて、夏のスイスも悪くないなと思いつつ出掛けたわけですが、お陰様で九十年前にホテルとして建てられたという由緒あるマウンテンハウス（MRA世界会議場）で有意義な三日間を過ごし、貴重な体験をさせていただきました。

ジュネーブの空港で出迎えて下さった方もボランティアなら、マウンテンハウスの受付もボランティア、会議の運営から食事の世話まで全てMRAのボランティアの方々がやって下さったのには本当に恐縮してしまいました。そこには私が長いこと忘れてしまっていた何かがあると強く感じました。それは「奉仕の精神」でした。

第二次世界大戦中私は小学生でしたが、いつも奉仕を強要されていました。奉仕という美名のもとで無料のサービスを提供させられたのでした。敗戦による価値観の逆転が子供の心に強い不信感を生み、奉仕という言葉も強制労働という体験と共に私の心から葬り去りました。

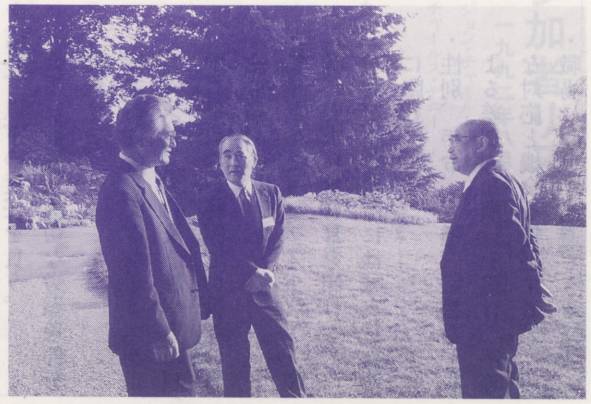
一九八〇年から五年間、私はアメリカで生活しましたが、そこでは多くの事がボランティアとか寄附という形で行われていました。それを見て、宗教の違いかなあと若干驚いてはいたのですが、今回、「世界平和」などという気の遠くなるような目標のために、仕事も私事も投げ打って真剣に取り組んでいるお方がおられるのを眼の当たりにして、本当にびっくりしました。私は漠然と、西洋は物質文明、東洋は精神文明などと考えていたのですが、とんでもない思い違いであることを知らされました。

これを機に、日本のMRA事務局から戴いた沢山の資料を読み、その活動が永い歴史を持ち、粘り強く続けられていること、戦後の日本が大いにその恩恵に浴したことなどを知るにつけ、活動なさっている方々に敬意の念を持つと同時に日本の奢りを反省させられました。

認識ギャップ解消のために日本人の心情を説明

コー・ラウンドテーブルは、MRAメンバーの方々が旗振り役をされて、日米欧間の貿易摩擦を「叩き合いでなく話し合いで」解決する糸口を探し出そうという目的で持たれたものだそうで、今年で七年目になりますが、各国からこれもボランティアとして参加された方々が熱心に討議されました。

欧米側の論調は、アンフェアーな競争をしかけて市場を荒らす日本をどうしたら改めさせることができるのかというもので、私は認識のギャップが大きいことを感じました。そこで若干時間を戴き、次のような説明をいたしました。すなわち、日本には欧米企業を抹殺しようなどという意図は全くなく、戦後の荒廃から立ち直るため必死に働いてきた延長線上に現在の行動があること、色々な面で未だ欧米に追い付いたとは思っていないこと、前進活動をストップしてしまうと自転車のように倒れてしまうのではないかという不安を今でも持っていることなど日本人の心情を説明すると共に、現在行われている競争は完全にルールに従っており、アンフェアーとは考えていないこと、ただルールとして明示され



●左から、日産塙副社長、本田岡村相談役、松下豊永専務

てはいないが、慣行として欧米では前提とされているものがあるようなので、それ等も考慮すべきだという意見が日本にもあることなどお話しいたしました。

さらに、今後我々を追い上げて来る多くの強力な国々があることも頭に置いて、フェアーであることの条件整備が必要なことも強調しておきました。賛否はともかく、日本の立場について若干理解を深めていただいたのではないかと思っています。

先ず理念を持った行動の実践から

全く異なった環境と状況のもとで遠く離れて暮らしていれば、日本人同士でも物の見方、考え方が違ってくるのですから、歴史を異にする民族間の相互理解にはかなりの努力と根気が必要なのだと思います。人類の平和共存は皆の願いなわけですから、我々は理念を持って事に当たらなければならないなと、皆さんの話を聴きながら痛感した次第です。

先ず行動するということがコー・ラウンドテーブルの精神だと伺いましたので、身近なところから実践していきたいと思っております。お世話して下さったボランティアの方々の努力を無駄にしない為にも。

ミネソタの企業理念
「グローバル・ビジネスの倫理的基盤を目指して」

コー円卓会議にて　一九九二年八月二十五日

ミネソタ企業責任センター

一、始めに

ビジネスは、その活動と影響との両面においてますます国際化し、グローバル化しているが、こうした領域における法律は、行動基準として必要であっても充分とはいえず、企業の行動や政策に対する責任と、ステークホルダーの尊厳と利益の尊重こそが基本であり、また、共有できる価値は、小さなコミュニティと同様、地球コミュニティにおいても重要であることに鑑み、私たちは、企業責任を模索しているビジネスリーダーによる対話の基礎となるよう、以下の提案を供するものである。

この提案によって私たちは、経済の意思決定における道徳的価値の正当性と中心性とを確認するものである。なぜなら、これなくして安定したビジネス関係や持続可能な世界コミュニティは実現しないからである。

二、一般原則

提案① 企業は公正さを旨として行動する。公正さには、市場の全ての参加者に対する公平な取り扱いと平等な機会とが含まれる。

提案② 企業は正直さを旨として行動する。正直さには、公平無私、誠実さ、約束厳守が含まれる。

提案③ 企業は人間の尊厳を旨として行動する。これは企業が、弱者や恵まれない人々に対して特別の配慮を示すべきことを意味する。

提案④ 企業は環境の尊重を旨として行動する。これは企業が、持続可能な開発を促進し、環境破壊と資源の浪費を防止すべきことを意味する。

三、ステークホルダーの原則

I　顧客

私たちの顧客には、直接私たちの製品やサービスを購入する人だけでなく、市場の公認ルートを通じてそれらを求める人々も含まれる。私たちの製品やサービスを利用するが私たちから直接購入しない顧客の場合には、ここに明記された企業行動基準を受け入れ、遵守するような市場及び組み立て・製造チャンネルを選択する最善の努力を行なう。私たちは、以下の責任を負う。

・顧客の要求を満たす最高品質の製品とサービスを提供する。

・高レベルのサービス、顧客の不満への対応を含むビジネスのあらゆる側面において、顧客を公正に取り扱う。

・製品とサービスによって顧客の健康と安全（環境も含む）が維持され、強化されるよう最大の努力を行なう。

・顧客の文化保全を尊重する。

II　従業員

私たちは従業員一人ひとりの尊厳を信じ、以下の責任を負う。

・公正な補償と適切な労働条件を提供する。

・従業員との正直なコミュニケーションと、法的及び競争上の制約に触れない範囲での情報共有を心掛ける。

・従業員の意見、アイディア、不満、要求に常に耳を傾ける。

・対立が生じた際には誠実に交渉に臨む。

・性別、年令、人種、宗教などによる差別的な慣行を避け、平等な対応と機会を保証する。

・職場において回避できる怪我、

病気などから従業員を保護する。

III オーナー・投資家

投資家が私たちに託した信頼を尊重し、以下の責任を負う。

・投資してくれたオーナーに対し、公正な利益を保証するため、プロフェッショナルかつ精励な経営を心掛ける。

・法的及び競争上の制約に触れない範囲で、オーナー・投資家に関連情報を公開する。

・オーナー・投資家の資産を保持、保護する。

・オーナー・投資家の要請、意見、不満、正式決議を尊重する。

IV サプライヤー

サプライヤーとの関係はパートナーシップであることを確信し、以下の責任を負う。

・ビジネス活動は、対立や不要な訴訟に拘束されることなく、公正な競争の促進を保証する。

・価値、質、信頼性を提供することで、長期にわたって安定した関係をサプライヤーとの間に築く。

・安定した関係を築くため、情報を共有し、計画段階からサプライヤーを参画させる。

・人間の尊厳を尊重する従業員管理を行なうサプライヤーを求め、奨励し、選択する。

V 地域社会

グローバルな企業市民として、ビジネスを行なう地域において以下の責任を負う。

・人権と民主的組織を尊重する。

・発展途上国や地域と協力して、健康、教育、職場の安全の水準を向上させる。

・持続可能な開発を奨励し、促進する。

・環境の悪化と資源の浪費を防ぐ。

・地域社会の平和、安全、多様性を支援する。

・地域文化の保全を尊重する。

VI 競争相手

国の富を形成し、最終的に製品とサービスの公平な分配を可能にするためには、公正な経済競争が最も効果的な方法であると信じ、以下の責任を負う。

・貿易と投資のための開かれた市場を育成する。

・社会的、環境的に利益のある競争を促進する。

・競争優位の確保のために疑わしい金銭の支払いや便宜を図るような行為に係わらない。

・物的、知的所有権を尊重する。

・技術革新の盗用につながるようなアイディアの盗用を行なわない。

第七回コー円卓会議参加者リスト

一九九二年八月二十三日～二十六日

■ヨーロッパ

フレデリック・フィリップス（オランダ）
フィリップス社元会長

オリビエ・ジスカールデスタン（フランス）
ヨーロッパ経営大学院副理事長

モーリス・アミール（フランス）
ティムケン・ヨーロッパ・アフリカ・西アジア社長

フレデリッヒ・ショック夫妻（ドイツ）
ショック社社長

グルト・シップス夫妻（ドイツ）
ロバート・ボッシュ社監査役会役員

ラインハルド・フィッシャー夫妻（ドイツ）
ブランコ社社長

フレデリッヒ・バウアー夫妻（ドイツ）
MST社社長、シーメンス元取締役

ネビル・クーパー夫妻（イギリス）
トップマネージメント・パートナーシップ会長

ジョン・コックス（イギリス）
化学産業協会理事長

ヘルムット・マーハー（スイス）
ネッスル会長

ピーター・フグラー夫妻（スイス）
インターアリアンス銀行頭取

アクセル・イベロート（スウェーデン）
プロコルディア社相談役

（オブザーバー）

バレリオ・デモリ（イタリア）
アンブロゼッティ社

ウラジミール・スプラン（CIS）
ロシア科学アカデミー哲学法律研究所教授

■アメリカ

ステフエン・ブラスウエル
プルーデンシャル保険投資サービスグループ本部長

ジョン・チャールトン
チェイスマンハッタン銀行常務

チャールス・デニー
ADCテレコミュニケーションズ社会長

ウォルター・ホードリー夫妻
元バンクオブアメリカ副社長兼チーフエコノミスト

トーマス・ハロラン
セント・トーマス大学教授、元メデトロニック社社長

ジェイムズ・ハウエル夫妻
スタンフォード大学ビジネススクール教授

ロナルド・ジェイムズ夫妻
USウエスト・コミュニケーションズ副社長兼CEO

ロバート・マグレガー
ミネソタ企業責任センター所長

ジェイムズ・モンゴメリー
パンナム・ワールドサービス元会長

ロジャー・パーキンソン
コウルス・メディア社副社長、スター・トリビューン紙前社長

■日本

小笠原　敏晶夫妻
ニラコ社長、ジャパンタイムズ会長

岡村　昇
本田技研常任相談役

賀来　龍三郎
キヤノン会長

河合　三良夫妻
経済同友会副代表幹事、専務理事

住友　義輝夫妻
住友電工顧問、MRA日本協会会長

豊永　恵哉
松下電器専務

塙　義一
日産自動車副社長

（オブザーバー）

宇川　秀幸
在ジュネーブ国際機関日本政府代表部大使

和佐　隆弘
日本経済新聞論説委員

MRA海外レポート　（中国）

アジアMRAグループ上海市青年連合会の招きにより初の中国訪問

＝これからの交流に期待＝

長野　清志
㈳国際MRA日本協会理事

アジアのMRAグループとして初めての訪中

去る八月六日から十三日の一週間、上海市青年連合会の招きにより、インド人一名、マレーシア人一名、香港から一名、台湾から二名、そして日本から一名の計六名で上海を訪れた。アジア人のMRAグループとしては初めての訪中となった。上海市青年連合会は上海を中心に八十万人の会員を擁し、青年のための文化活動を行なったり、意見交換を行なう場を提供したり、青少年犯罪の防止のための解決法を探ることなどを主な使命としている団体であり、MRAの考え方を学ぶため交流をしたいとのことで今回の訪問が実現した。

着いた翌日から一日一ヶ所づつ、三つの支部を訪れ青年幹部たちと意見交換を図った。一日目は最初双方とも戸惑いがあったが、MRAの考え方を知ってどのように自分が変わっていったか、又、自分の人生の目標を見い出したかといったそれぞれの体験を率直に語り、中国語の歌などをグループで歌った後には雰囲気も和らぎ、質問も出始めた。二日目に訪れた支部では勝手も少し分かり、最初から打ち解けた雰囲気を醸し出すことができた。やはり我々の体験を分かち合った後、元判事だったという一人の女性は、「皆さんは心から話をしてくれた。今、多くの社会問題があるが、皆さんの体験はそれらの問題を解決するための良い教育材料となる」と述べ、「一人ひとりがもう少しづつ愛を与えれば、より良い世界が生まれる」という中国で流行ったという歌を引用して感想を締め括った。三日目に訪れたのは上海市の中心部に位置する支部で、大変活発な意見交換がなされた。青年連合会側の参加者は主に教育関係者であったが、その一人の幼稚園の園長を務める女性は、「熱心な仏教徒である母の影響を受けて育った。今、子供たちの抱える様々な問題をどのように解決したらよいかアドバイスして欲しい」と要請した。それに応えてMRAの側からは、子供に静かな時間を持たせる習慣を付けさせた結果、子供たちが両親が驚く程変わったというインドの小学校での体験等が伝えられた。こうした各支部での交流の他にも、老人ホームや工場見学等の機会を得ることができた。又、一日は上海郊外のキャンプ場に案内され、バーベキューの夕食をご馳走になり、テントに泊まる体験もした。バーベキューを楽しむ家族連れの姿や、何百と立ち並ぶテント群に変わりゆく中国を実感した。又、その緑の多い美しさで有名な杭州をも訪ねる機会を得たが、ここにも年間二千万人の観光客が中国各地から訪れると聞き、中国の社会に[illegible]だけの余裕が生まれてきていることを感じた。更に、同時期に台湾から百二十名に上る女子高校生のブラスバンドが招待されていたなど、中台間の交流の深まりも改めて感じさせられた。

中国人の家庭も訪問する

幸いにも中国人の友人の家庭にも二回招待された。最初の家は典型的な中国風の家とでも言うべき所で、暗く狭い路地を入り、薄暗い階段を上って部屋に入った。部屋の中は綺麗に整頓され、ピアノやカラオケセットまで揃っていた。迎えてくれた家族が我々の知っているオーストラリアに留学中の息子にすぐに国際電話をかけたのにも大変印象付けられた。又、二回目に訪ねた家庭の十四才になる娘さんは、我々が到着して以来四日間行動を共にした。食事に先立って挨拶に立った彼女は、「年令の違う私に皆さんは全く同等に接してくれて、とても勉強になった。自分もこれから皆さんと一緒にMRAをやっていきたい」と両親の前で述べた。

この度の訪中で知り合った多くの友人たちとの出逢いを大切にして、これから更なる交流を積み重ねていきたい。

アジア・太平洋青年キャンプレポート

テーマ

「共通の未来への架け橋－相互理解、癒し、そして信頼作りのために」

●会場：台北、台中、その他

●期間：1992年7月24日～8月2日

日本からは三名が参加

去る七月二十四日から八月二日の十日間にわたり、今年で第三回目となるMRAアジア・太平洋青年キャンプが台湾で開催された。

『共通の未来への架け橋―相互理解、癒し、そして信頼作りのために』のテーマの下、オーストラリア、インド、マレーシア、香港、韓国、台湾、そして日本からの参加者、二十余名が集い、お互いに〝架け橋〟になるために何をなすべきかを探り合った。日本からは、中国帰国者二世であり、現在同様の境遇の子供たちのために夜間中学で通訳をしている岩佐長子さん（キャンプでも日本語と中国語の通訳として活躍してくれた）、韓国で生まれ日本で育った呉東桓さん、そして、慶応大学二年生の松本佳子さんというユニークなトリオが参加した。

キャンプの一日は、朝、静かな時間を持って自分を振り返ることから始まった。「自分の人生の目的とは」、「自分はどんな人間で、強いところ、そして弱いところはどこか」、「自分や自国、そして世界の中で嫌いなところがあれば、それを変えるために何が出来るか」、「自分の家族関係は望ましいものになっているだろうか」などといった質問の書かれた紙が渡され、それぞれが得た考えを基に話し合いがなされた。

日本からの参加者の一人は、十日間程度の期間でお互いに親しくなれるだろうかという疑問を抱いていたようだったが、通り一遍でない、心の深いうちを披瀝し合う中で、二～三日の内に、皆とすっかり打ち解けていた。韓国から参加した大学生は、「ある日本人の心ない言葉に傷付き、日本人を嫌っていたことを謝りたい」と話してくれた。戦争を初めとした過去の歴史の傷跡が、今尚痛みをもって語られるのを聞いた。台湾のある女性参加者は、「自分はいつも若い世代がなぜ過去の重荷を背負っていかなくてはならないのかと思っていたが、過去を清算しない限り、共通の未来が築けないと分かった。MRAは心と心の交流であり、憎しみの問題を解決し得る」と語った。又、ある日、ご主人の仕事の関係で台湾に住んでいるというインド人の女性が、人間関係をテーマにしたミーティングを傍聴した後、「自分は既に四年台湾に住んでいるが、中国語は一言も学ぼうとしなかった。主人の会社の中国人社員二人を自分たちの家に寄宿させているが、彼らにも全く心を使っていなかった。これからは彼ら二人に、そして台湾の社会にもっと心を使っていきたい」と静かに語った。その他にも、貿易会社を経営する若い台湾の女性が、「ある国でパキスタンのビザを取得する時間を短縮するために、係の人にそっとお金を渡すというようなことをしていたが、これからは二度とやらない」という決心を述べたり、環境問題への個人の取り組みへの決心等が語られた。

大きな友情の橋が確かに架けられた

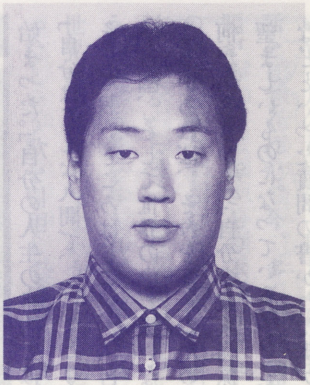
ミーティングの合間には各国語での歌や、チームワークをテーマにして作られた寸劇の練習も行なわれ、三日目の夜には地域のコミュニティー広場で、地元の音楽家も加わって開かれた〝文化の夕べ〟で早速披露された。楽しいスポーツやゲームの時間も用意された他、台湾の社会状況を学ぶための機会も多く与えられた。鹿港という古い歴史を持つ街や清華大学への訪問、生涯教育を行なっている団体との交流、そして国会訪問や議員との懇談の機会等も設けられた。

十日間という短いキャンプではあったが、寝食を共にし、一つの大きな家族のように過ごした参加者の間には、大きな友情の架け橋が確かに架けられたようであった。

APCレポート

宗教や国の違いを乗り越えて

呉　東桓
現在イギリス留学中



皆が一生懸命私の話に耳を傾けてくれた

台湾で開かれるMRAアジア・太平洋キャンプに参加してみないかという誘いを受け、以前からアジアの国々には興味を持っていましたし、旅行が好きな私としては、機会があればアジアの国々をまわってみたいと考えていましたので、少し不純な動機ではありますが、台湾を旅行できるという軽い気持ちで、参加を決めました。

参加前に、MRAの方にいただいた資料やキャンプの日程を見て、ある程度の準備はしていましたが、それでも少し不安なところもありました。しかし、いざ参加してみると、スタッフの人たちがキャンプの参加者全員が気持ちよく過ごせるように様々な努力をしてくれましたので、キャンプ中はさほど不自由を感じることなく楽しく過ごすことができました。

ただ、キャンプ中一つ残念に思ったのは言葉の問題でした。これは私に責任がある問題なのですが、キャンプでは英語と中国語を公用語として使っていました。大学で一年間勉強したはずの中国語はもちろんのこと、十年近くも勉強したはずの英語もまったく理解できず、最初のうちは他の国からの参加者と話すこともできず、通訳してくれた人の近くに座ってただ黙って話を聞くだけでした。あまり話さずにただ黙っているだけの私に対して、それでもキャンプに参加しているみんながとても親切にしてくれたので、これに勇気づけられて[illegible]言の英語でたどたどしくではありましたが、他の国からの参加者と会話するように努めました。今でも、自分が言いたかったことがどれだけ相手に伝わったのかはわかりませんが、私の言葉を一生懸命に聞いて理解しようとしてくれた皆さんに助けられて、キャンプの後半では、なんとか他の国の人たちと少しではありますが、話ができるようになりました。

新しい目を開かせてくれる転機となる

キャンプに参加して最も意外に思えたことは、参加者はそれぞれの国が違うだけでなく、それぞれの宗教も違っていたのに、自分の宗教を堅く信じ、その教えを守り、そのことに誇りを持って、その教えに従って自分は生きていながらも、自分の宗教を他人に押し付けようとせず、また、違う宗教に対して、それを理解し共に生きようとする姿勢が強く感じられたことでした。このことは、実際キャンプに参加していた人たちの中で、上座部系の仏教の人と、プロテスタント系のキリスト教徒の人に、それぞれ別の時にそれぞれの宗教、あるいは他の宗教との関係について話す機会があり、その時の私の疑問に対するそれぞれ[illegible]の答えから、その様に感じることができました。中には不躾な質問もあっただろうに、怒りもせずに、笑顔で答えてくれました。

このキャンプに参加していたのは、ある意味で宗教や国を超えて、同じ人間として自分と違う文化や歴史を持った人々と、共によりよく暮らして行くための方法を模索し、実践していこうとしている人々でした。不純な動機からこのキャンプに参加した私には、これらの人たちと友人になれたことは思いもよらぬ大きな収穫であり、私に新しい目を開かせてくれる転機にもなりました。

●夕食に招いてくれた家庭で語り合う参加者たち（左から２人目が呉さん）

APCレポート

APCに参加して

松本 佳子
慶応大学二年

三つの目標を持って参加したアジア・太平洋キャンプ

台湾からの帰りの飛行機の中で、私の心は二つの考えに占められていました。一つは、ひたすら淋しいという気持ち、そしてもう一つは、私がAPCで感じたことを、どうやって人に伝えようか、ということでした。

私は九二年七月二十四日から八月三日の期間、台湾で催されたMRAアジア・太平洋キャンプ（APC）に参加しました。その時、私はほんの二ヶ月ほど前に、大学で英語の授業をしていただいている荒井先生から、MRAについて教えていただいたばかりでした。先生は、昨年と今年、コーの世界大会に参加されたり、他にもご自分で活動なさっており、私は、先生が持っていらっしゃるグローバルな世界にあこがれたのでした。

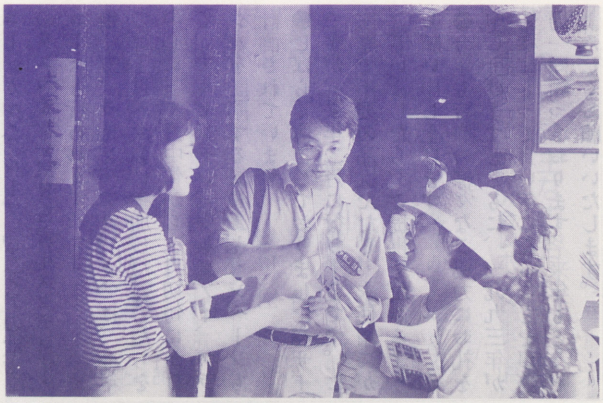
いくつかの理由があって、コーでの世界大会の参加をあきらめ、APCに参加させていただくことになったのですが、私もそれなりに目標を持ってAPCへの参加を決心しました。その目標は三つありました。一つめは、アジアを自分の目で見てくること。海外には二度目というものの、アジアは初めてだったのです。二つめは、日本はアジアの中でエラいんだ、という私の優越感を正してくること。この気持ちは、私の心の中でいつの間にか固定観念みたいなものとなり、その座を譲ろうとしなかったのです。三つめは、MRAがどういう活動をしているところなのか、よく見て聞いて感じてくることでした。何しろその時は資料という形でしかMRAを知りませんでした。

台湾、APCでの十一日間に、私が、アジア・太平洋圏の八カ国・地域からの参加者と一緒に過ごした時間というものは、何だか絞っても絞ってもまだ味の出るジュースのような気がします。三つの目標を掲げて、アジアへ行ったと思っていた私は、日本だって、アジアの国なんだ、けれど、日本人はアジア人だとは思っていない、ということを感じたというか、気づかされたのでした。

「日本人をやめたい」という気持ちになる

日本の占領、植民地政策、その他、APCの期間中何度か、「日本人をやめたい」という気持ちになりました。自分の目の前で、自国の歴史を話すとき涙を流す人々を見て、私は何というかガンッときたというのか、その場から逃げだしたくなったというか、確かにショックを受けたのでした。そして、その中で、私一人だけが、涙を流すようなつらい心の背景を持っていなかったのでした。しかも、そのような背景が、彼らの心の中に存在することの痛みを、涙を流して分かち合うことができなかった私に向かって、彼らは、「今はもう日本を憎んではいない。過去は過去。これからを一緒に考えるべきだ」と言ったのでした。

MRAでは、「先ず自分から変えよう」といいます。私は、何度もこの言葉を聞くたびに、そうだろうな、くらいにかすめて聞いているだけでした。APCで、自分が日本人であるということを思い知らされ、これから何かを始めていこうと言われたものの、帰国後の自分の生活を思い浮かべるにつれ、まるで重石のように、心を圧迫してきたのが、この言葉だったのです。



●訪問したお寺で台湾の参加者から説明を受ける松本さん（左）と岩佐さん（左から２人目）

人々の善意が物事を動かしていくすごさ

帰国して、自分の生活を始めるにつれ、初め私の心は、友達との別れからくる淋しさ、その次に相談できる友達がすぐ傍にいた、あの時間に戻りたい、という回顧心、そして、最後に自分は何一つ変わらなかったんじゃないか、という恐怖心に、次々と占領されました。今はというと、一種の放任主義、政策を行っています。つまり、あのＡＰＣの十一日間は、これから少しずつ絞り出して行こうと思っているのです。上手くいくなら、できるだけ長く、と。

私の三つの目標のうち、一つめと二つめは、私の中で、日本の位置づけ、日本人であることの気持ちの位置づけが、少しずつ変化してきているようで、「初めの一歩」が踏み出せ始めたようです。三つ目のＭＲＡとは、という問いへの答えは、今まで、そして、これから私がＭＲＡで出会う人達との関係の中で、会得されていくのではないか、と思っています。

ＡＰＣへの参加の中で、私は人々の善意が物事を動かしていくのを見て、初めてすごいなと思いました。私たちに、善意を差し出して下さった人達に、一言お礼を言いたいです。

◇ＭＲＡ関係ビデオのご案内

ダライ・ラマ14世からのメッセージ

愛と心の平和

編集・発売　アジア・フォーラム
企画・制作　㈳国際ＭＲＡ日本協会

好評発売中！

ＶＨＳ（20分）4,500円　日本語吹き替え

◇ＭＲＡ関係書籍のご案内

アジアから人類へのメッセージ

宗教が語る世界の平和

㈳国際ＭＲＡ日本協会 編　ＰＨＰ研究所 発行

定価1,500円（税込）
四六判上製　208頁

推薦のことば

米ソを中心とした二極冷戦構造が崩れ去った現代。21世紀に向けて新秩序の構築が求められているが、いまだ暗中模索の状況にある。この混沌とした時代に一つの道筋をつけるものは一体何なのか。

『宗教が語る世界の平和』では、ダライ・ラマ、ハイメ・シンなど四大宗教の指導者達が、良心、道徳等に基づいた21世紀に向けてのアジア・日本の貢献・役割を示唆していく。

本書は、国際貢献、モラルの再構築が求められる日本の今後のあり方を問う好著である。

松下電器産業㈱相談役
山下俊彦

アジアを越え、宗教を越えて、今、非暴力の理念を世界へ

事務局近況

●疑獄で始まり疑獄で終わろうとしている一九九二年です。不況も長引き、いつになく寒さが身に沁みる冬の日々ですが、皆様はそれぞれの明るいニュースやさわやかな出来事を回顧あるいは展望されていることでしょう。「暗闇を嘆くよりも、一本のろうそくを点けよう」というＭＲＡの歌があります。

●インドのＭＲＡセンター「アジア・プラトー」は、来年で建設二十五年目を迎えますが、それを祝って様々なプログラムの開催が予定されています。一月に開かれる国際会議には日本からも数名が参加する予定です。また、一九七〇年代中ごろにアジア、ヨーロッパ、北アメリカ大陸を回ったＭＲＡミュージカル・グループ「アジアの歌声」のリユニオンやＭＲＡ青年スタディー・コースも行われます。

●一方、ラテン・アメリカでは、今年のコー世界大会に参加した若者たちを中心に、二月中旬から三月初旬にかけて、アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジルを訪問するＭＲＡキャンペーンも計画されています。

●しばらく休止しておりましたバザーですが、来年二月に行う予定です。ご家庭で不要の品（ただし、未使用）がございましたら、ご提供くださるようお願い申し上げます。

●今年も皆様の様々なご協力にお礼を申し上げますとともに、一九九三年が皆様にとって良い年になることを事務局一同願っております。来年もどうぞよろしくお願いいたします。